

9月は新学期が始まり、また、さまざまなことに新たな気持ちで取り組める時期になりましたね。ヨーロッパでは、9月が新年度となり、学年が改まりますが、今から何十年も前のウィーン留学第1年目のことを昨日のことにように思い出します。年でしょうか…（笑）。今月は、ヨーロッパの高等音楽教育のシステムについてお話します。

私は、6月にウィーン市立音楽院の入学試験を受験し、9月1日にその発表があったと記憶しています。日本のように、合格発表などという華々しさは全くなく、音楽院の掲示板に小さく貼り出されているだけでした。ヨーロッパでは、あまり学年にこだわりはなく、飛び級もあり、年齢と学年は、バラバラでしたし、入学の年齢も留学生にとっては、あまり関係なく、合格発表は、ウィーン市立音楽院に在籍が認められたということになります。掲示板には、担当の先生の部屋番号と第1回目のレッスンの時間が書かれており、この掲示を見たら一度事務所に来ること、という素っ気ない情報があるだけでした。日本では、両親はじめ、習っていた先生も私の試験結果をかなり心配しながら待っていましたので、今とは違い、携帯電話もラインもない中、交換手を使っての国際電話で知らせたことを思い出します。当時は、大変若かったこともあり、日本の先生は、「まだ、日本で学ぶことはたくさんある。」と留学には反対されていました。しかし、若いということがヨーロッパでは、よい方向に作用し、多くの先生に「まだ、若いだから、知らないことは、今から学べばいいのです。」と言われ、俄然やる気ができました。また、ヨーロッパの先生は、ほとんどレッスンで怒ることがありません。音楽は、怒鳴ったり、大声をあげて教えるものではなく、理論的に説明があり、それに加えて先生たちのさまざまなエピソードや体験、別な芸術との関連、思想、哲学などを含む教養的な要素を話してくださいました。ピアノの技術だけではない、本物の音楽が何であるかをじっくり教えていただいたと思います。

今の学生たちは、私の留学時代とは大きく異なり、通信技術が格段に発達し、簡単に情報を得たり、メールで世界中に通信したりできるようになりました。留学も簡単にできるようになったかということ、ヨーロッパの入試も音楽だけではなく、語学力が重視されるようになり、特に日本人にとってはハードルが高くなっているようです。私の留学時代は、まだ、日本の先生の留学経験が極端に少なかったため、日本的で、根性や我慢を強いる訓練のような教授法でしたが、私たちの世代が長い留学経験を持ち、今の学生は、日本にしながら、ヨーロッパ的なレッスンが受けられるようになりました。しかし、留学の本質は今でも変わらないと、私は考えています。それは、異文化を肌で感じることに、また外国語での生活による思考法の体験などは、その土地に四季を通して住まなければわからないからです。ヨーロッパ（海外）と日本は文化や思想が違っていると頭ではわかっている、実際に体験して初めてわかることが大切なことなのです。特に西洋音楽を専門にする私たちは、その発祥の地を踏むことで、必ずやその本質が見えてきます。私は、若い音楽家の卵たちが、海外に行くことを推奨します。それは、8年の留学経験が、私の音楽の基礎を築いているからです。